

秋田県・「雪と仲良く」を目指す横手市

～魅力ある雪国へイメージ転換～

日本不動産研究所 秋田支所
不動産鑑定士 國松 了

大雪の影響は深刻

今年2月、関東甲信地方など広範囲で記録的な大雪となった。大雪は、秋田県内でも人々の生活に深刻な影響を及ぼしている。

横手市では、累積積雪量が28年ぶりに10メートルを超え、観測史上2番目の記録となった。また、この冬、秋田県内の雪に絡む事故による死者数は、北海道に並び全国最多の17名になるなど、雪に関する報道が目立った。

大陸から北西の季節風に乗って運ばれる雪雲は、奥羽山脈に阻まれて、秋田県の県南内陸地域に大量の積雪をもたらす。この地域の雪の多さは、県内でも屈指の土地柄となっている。重く湿った雪は、死傷事故といった人的被害のほか、電線や果樹への着雪による断線や倒木、家屋の倒壊といった被害をもたらす。



「雪に埋もれた民家・1」



「雪に埋もれた民家・2」



「雪の重みで倒壊した住宅」



「道路の両側は3mを超える雪の壁」

雪の多い山間部の集落地域では、人口の減少と高齢化の進行により、屋根の雪下ろしや、除雪を自ら行うことが困難な高齢者世帯の増加といった問題に直面している。地域によっては、ひと冬に3回程度の雪下ろしが必要となるが、これを業者に依頼すると、1回あたり5万円を超える費用がかかる場合もあるという。年金で生活する高齢者にとっては、たいへんな負担だ。

そんな中、横手市では、暮らしにうるおいを与えてくれる自然の恵みとして雪を積極的に受け入れ、雪を生かし、市と市民、事業所が一体となって快適なまちづくりを進め、魅力のある雪国を創ることを目的として「横手市雪となかよく暮らす条例」を制定し、多くの施策を打ち出している。

NPOと連携し、地域住民による除雪の支援体制を組織し、高齢者世帯等の除排雪作業を行う団体へは、市から除雪機械を貸し出すなどの方策により、「共助」による除雪体制の確立に取り組んでいる。また、老朽化して危険な空家については、市が解体を支援し、その跡地を雪の堆積場として活用するといった事業や、コーディネーターを育成し、困っている高齢者世帯と雪よせボランティアを結びつけるといった事業にも取り組んでいる。取り組みは、除排雪にとどまらず、前向きに雪を活用し、楽しもうとする活動へも展開されている。

「かまくら」を出前

横手市の「かまくら」は、高さ3m、直径3.5mの雪室の中に水神様をまつり、子供たちが餅を焼いたり、甘酒を振る舞ったりして遊ぶ行事で、400年の歴史があるといわれている。このかまくらを県外に出前するというユニークな事業も行われている。首都圏等にトラックで雪を運搬し、かまくら職人を派遣して、雪とふれあう機会の少ない地域の人々に楽しんでもらおうという考えで、毎年6~7箇所で行われている。地域間交流を促進し、観光PRにもつなげたい考えだ。



「横手のかまくら」

また、やっかいで重労働となる雪よせをスポーツとして楽しもうと「＼スポーツ、YUKIYOSE 世界大会 2014in よこて」というイベントが今年初めて開催された。約2mの雪が積もったグラウンドで、前後半各60分の制限時間内に、幅3mのレーンをどれだけの距離、雪かきできるかを競う競技だ。

雪国に対するイメージを転換できるか、これらの取り組みによる効果に期待が高まる。



「重労働でもある「雪よせ」の様子」